

研究ノート・活動報告

地域づくり型保健活動の手法を用いて区民・事業者・行政との
協働で進めた取り組み

～健康きたざわプランの概要と平成19年度の活動報告～

きたざわ健康まねきの会

はじめに

世田谷区北沢地域（人口14万）では、平成18年度に区民、事業者、行政の委員からなる健康まねきの会^{※1}で「後期健康きたざわプラン（以後プランとする）」を策定した。プランは、区民の健やかでいきいきとした暮らしをめざし、『地域づくり』に主眼をおいた“地域づくり型保健活動”^{※2}の手法を用いて作成した。このプランは区民・事業者・行政それぞれの役割を盛り込んだ具体的な行動計画であり、平成19年度から計画に沿って取り組みを進めている。プランの概要および健康まねきの会の取り組みを報告する。

実施内容

1. プランの概要

(1) “地域づくり型保健活動” 手法でのワークショップ実施

北沢地域が『誰もが 健やかに いきいきと暮らす』地域であることをめざして、参加的目的描写法により、3つの世代（子育て世代・青少年世代・高齢者世代）を切り口に、それぞれの「健やかでいきいきとした暮らし」についてどのように考え、何ができるかをワークショップ形式で検討を行った。（ワークショップは各世代ごとに2グループつくった）

ワークショップの経過

- ① 各世代の「健やかでいきいきとした暮らし」の『(理想とする)実現すべき具体的な姿』を、一枚の絵や映画の一場面のように、誰もがわかりやすい具体的な表現で、描いた。
- ② 『(理想とする) 実現すべき具体的な姿』を実現するために必要な条件、その条件を実現するための『具体的な行動』を、主語をはっきりさせながら目的関連図^{※3}として整理し、上位の目標も定めた。
- ③ 計画書の基本的考え方の部分の作成（目的関連図の文章化）も、まねきの会のメンバーのワークショップで進めた。

このワークショップで用いた参加的目的描写法は、参加者が直接顔を合わせて意見交換しながら、相互の認識を深めたり、相互の価値観を認め合う過程が重視される。これまで経験している話し合いのスタイル（現状分析から問題点を抽出し、その問題の解決策を考えるという方法）と違い、メンバー全員に戸惑いがあった。しかし、誰が何をするという

様々な具体的な取り組みがあげられている目的関連図が、このプランの基礎となり、皆で話し合ってきた文言が実際に文章となってまとまったことにより、メンバーにとってこのプランがわかりやすく愛着のもてるものとなった。

(2) プランの基本的な考え方

ワークショップを通じて、各世代について次のような「基本的な考え方」ができあがった。

子育て世代

北沢地域では、子どもたちが地域の中で心身ともに健やかに育つことをめざしています。

そのためには、いろいろな年齢の子どもたちが、身近な自然の中で一緒に遊んだり、親がゆとりを持って楽しく子育てできることが重要です。

例えば、幼児と小学生の子どもたちが一緒に、近所の空き地や公園でボール遊びやどろんこ遊びで楽しんだり、母親がたまには友達と気軽にランチやショッピングやコンサートなどを楽しみながら子育てができることです。

青少年世代

北沢地域では、青少年が自信を持って充実した生活を送り、いきいきと暮らすことをめざしています。

そのためには、青少年が地域の中で様々な人と交流したり、自分のやりたいことを自ら発信し、実現できることが重要です。

例えば、中高生が梅まつりやきたざわまつりをはじめ、地域のイベントなどで、地域の人たちと一緒に活動したり、自分たち独自で趣味をいかした音楽演奏や演劇、ダンス、フリーマーケットなどを企画・運営することです。

高齢者世代

北沢地域では、どんな人でも、自分のやりたいことを持ち、それに熱中することができ、また、自由に外出したり人との交流を通して、いきいきと暮らせることをめざしています。

そのためには、病気や障害があってもそれと上手につき合い、自分の好きなことを見つけ、熱中でき、行きたい場所へ出かけたり、友だちと会うなどして楽しく暮らすことが大切です。

具体的には、いつの間にか杖を忘れて、近くの公園でグランドゴルフなどのスポーツやゲームに熱中したり、友だちと一緒にタウンホールで落語を聞いたり、演劇を観た後、食事をしながら会話を楽しむことなどです。

今回は3つの世代をとりあげたが、これら3つの世代の検討で共通して言えること（交流や支え合い、楽しみやゆとり、自分らしい生き方の実現、等）は、他の世代や病気や障害のある人たちにも同じように言える。これら3つの世代を中心とした取り組みをすすめることで、北沢地域に暮らすすべての人たちの「健やかな いきいきとした暮らし」の実現につながると考えた。

2. 平成19年度の活動報告 ～具体的な行動計画より2つの取り組み～

健康まねきの会では、プランで定めたさまざまな具体的な行動を、実行のしやすさ、効果の大きさなどから整理し、何を取り組んでいくかを話し合った。結果として投票により次の2つの取り組みを選び、展開した。

(1) 北沢くるみん

『実現すべき具体的な姿』：専業主婦のお母さんが子どもをおいて、たまには友達と気軽にランチに出かけられる

『具体的な行動』：まねきの会がまねきニュースにお預けバッグ（連絡先や対処の方法が書いてある）の作り方をのせる

子育て中の親が少しでも「ゆとり」を持ちながら楽しく子育てできるように“家族ぐるみ”“会社ぐるみ”“地域ぐるみ”での子育ての環境づくりをめざす。この活動を「北沢くるみん」と名付け取り組んだ。北沢地域の児童館・子育てサロン・幼稚園・乳幼児健診会場でアンケートやインタビューを行い、その結果を話し合い、父親向けの“19時（いくじ）に帰ろう”冊子を作成した。

①作業部会での経過

<世代間ギャップの中での話し合い>

老若？男女、様々な年齢層が在籍するまねきの会。世代間ギャップや価値観の違いの壁は厚く、「なぜ『ゆとり』がランチに繋がるのか？子どもを置いて友人とランチ？母親がヒマするの？」と理想の姿の共有は困難だった。「母親の息抜きが必要」「大変なのは当たり前」など子育て事情の変遷や個々の感じ方の違いに議論が集中し、作業部会の前半は何度も何度も目的に戻るといった確認作業をした。

『お預けバッグ』は何のためのバッグなのか？から「それぞれの家でバッグの作成時に家族で子育てについて自然に会話ができたらいいなあ」「言葉だけで伝えるのは難しい。会話のきっかけになる媒体がほしい。」「そのためには子育て真最中のお母さんの声とお父さんの思いを聞こう！」とアンケートを実施した。

<アンケートの実施>

内容：①子どもを「預ける」「預かる」事についてのお父さん、お母さんの思い

②お薦めの遊びや遊び場を教えてください！

対象：0歳～就学前までの子どもを持つ両親と祖父母など

方法：北沢地域の児童館・子育てサロン・幼稚園・乳幼児健診会場で、まねきの会メンバーが主旨説明をした後、インタビューまたは自記式アンケート

<アンケート結果>

回収 275 通。主な内容は以下の通り。

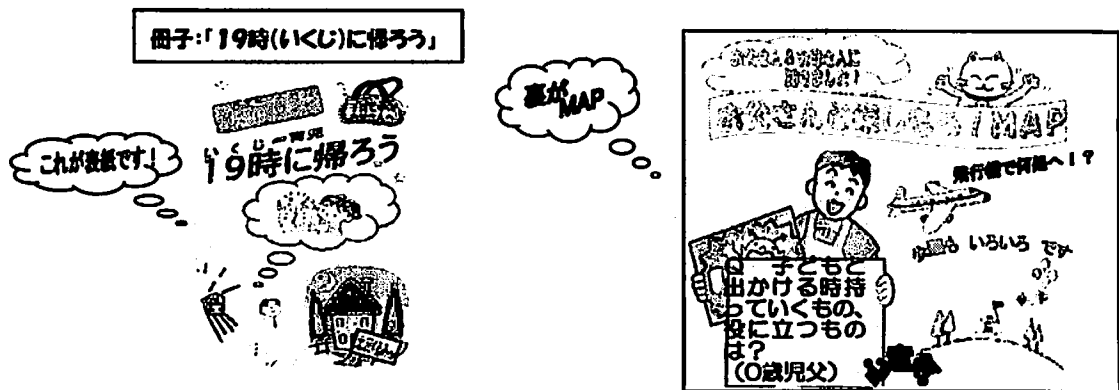
- ・ 母が一番したいこと：ゆっくり買い物。美容院。映画を見たい。寝たい。
- ・ 預かる時の心配：泣き止まない。ミルクを飲んでくれない。熱などの病気。
- ・ お出かけお薦めの場所：新宿のデパート（屋上から電車をみよう）。

羽根木公園（プレーパーク）。

<媒体の作成>

以下のことを目指して、働いている父親にむけて、母親の状況や思い、父子のお出かけのお勧め場所マップなどの内容の小冊子『週に一度は19時（いくじ＝育児）に帰ろう』を作成した。

- ・ 家族で子育てについての会話のきっかけになる
- ・ 父親自身が『育児』を意識できるようになる
- ・ 職場の意識や雰囲気は帰宅の後押しをする（上司の理解）
- ・ 父親が子育てに慣れて、夫婦で育児をする機会が増える



②成果と課題

世代間ギャップの中で「目的は何か？」を繰り返し話す作業やアンケートへの取り組みの中で今どきの子育て事情が語られ、現実の子育て世代の声を確認できたことがその後の委員による小冊子の本格的な普及活動の大きな原動力になった。

今後、地域ぐるみの子育てを進めるにあたり、子育て世代以外の人に現代の子育て事情への理解と共感をどう得られるかがポイントと考えられる。

(2) ほっとすぺーす ベンチとトイレ

『実現すべき具体的な姿』：友達と一緒にタウンホールで落語をきく（高齢になって杖をつくようになっても）

『具体的な行動』：まねきの会が商店街にトイレを貸してもらえるように働きかける

北沢地域に暮らす誰もが安心して外出できるように、街の中や商店街などで座る場所やトイレを貸してもらえる…そんなまちを目指そうと、ほっとできるスペースをつくるため「ほっとすぺーす ベンチとトイレ」と命名し取り組んだ。

①作業部会での経過

<不安が高まった話し合い>

作業部会では「作られた椅子が子どもにこわされていた(地域振興課)」「歩道上は危険! (視力障害者代表)」「近くのスーパーでは買わないお客にはトイレの使用を断っていた(区民委員)」などの発言で、本当にできるのだろうかと不安が高まる。まずは、先駆的に実施している場所へ視察が決まった。江古田ゆうゆうロード(練馬区)と巣鴨地蔵通り商店街(豊島区)を視察した。『トイレを使う人は1日に数人、汚されたことはないよ』『お客様を見て自宅トイレを貸すか公衆トイレに案内するかを決めている』などの声を聴く。

<北沢地域の7つの商店街を訪ねて>

北沢ブロック商店街常任理事会定例会に伺いプランの主旨を説明し、地元商店街の実情を知ることから始める。明大前・下高井戸・豪徳寺・東松原・経堂・梅丘・下北沢一番街商店街を訪ね、それぞれの商店街の現状や課題をまねきの会委員が確認した。

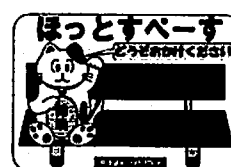
商店街訪問では「消費者懇談会でトイレがあるとよいと言われた」「すでにトイレを設置している」「トイレは無理だけとお休み処を設けて、皆さんに使ってもらっている」「店番が女性なのでトイレを貸すのは怖い」「だれでも座れるようにお店の前にイスを置いている」などまちの率直な声を得られ、難しい面がある一方、様々な工夫を凝らした取り組みがすでに実施されていることがわかった。



豪徳寺商店街 お休み処

<ほっとすぺーすの普及とステッカー作成>

普及のツールとしてユニバーサルデザインを考慮したステッカーを作成した。また、普及先として、まずは北沢地域の公的機関へ掲示の協力依頼をする。同時に地域の施設などへ働きかけたり、あんしんすこやかセンターなどの関係機関への協力依頼も始まった。同時にまねきの会ニュースや区報に掲載し、区民からの意見や協力を得た。



②成果と課題

管内の商店街を訪問することはステッカーを貼ることに終始せず、プランの主旨を理解してもらうことを大切にしたい。また、すでに“トイレやベンチ”への取り組みを実施していたり、困難さを抱えて実施できないでいることも、まねきの会のメンバー間で共有できた。さらに、北沢管内ではNPOなどがすでに“まちの中にベンチやトイレをつくろう”と取り組んでいる情報も得た。今後、プランの主旨の普及と同時に商店街や町会、社会福祉協議会や個人に働きかける際のツールとして『ほっとすぺーすの作り方』を作成予定である。

今後の課題は、健康きたざわプランをまねきの会の委員だけの取り組みにしていけない

工夫である。そのためにも地域で実施されている“トイレやベンチ”への様々な取り組みが“プランの目的”をどう共有できるかを考えていく必要がある。

3. 評価

プランの評価のために平成 19 年度に管内の中学生とその親、幼児の親、熟年世代を対象に、“健康きたざわプラン評価のためのベースライン調査”を実施し、現状把握を行った(4,487 人に配布、2,264 通回収、回収率 50.5%)。

子育て世代では“お母さんのゆとり”について幼児の母親の約半数が「自分の好きなことができる時間がない」と答えていた。また、“まわりの人の支援”では母親の 3 割が『子どもを預かるからリフレッシュしてきて』と声をかけてくれた人がいない。声をかけてくれたのは「親」が最多で、「配偶者」は次という結果だった。高齢者世代では困った時に頼める人がいない人は熟年世代では 1 割弱。自転車の置き方には多くの人(各世代)が気をつけていることがわかった。今後もプランにそった取り組みを進め、平成 22 年度に同様の調査を実施し評価を行なう。

おわりに

きたざわ健康まねきの会は、発足当初の平成 13 年より区民・事業者・行政がともに「北沢地域がどんな地域だったら健康に暮らせるか」をテーマにおき検討を重ね、活動してきた。また、平成 17 年度の前期プランの中間評価(プロセス評価)では“区民・事業者・行政での参画・協働”の視点からの評価軸を区民とともに作成した。たとえば『発言の自主性』～「皆が(住民も行政も)自発的に意見を出す」、『話し合いの様子』～「参加者同士が意見を交換したうえで決まる」など“まねきの会のめざす姿の評価軸”を設定した。また、メンバーの入れ替えなど状況の変化があっても、その都度これまでの取り組みかたを確認することで、現在でもまねきの会のメンバーが個々に自主的に役割を持ちながら取り組んでいる。このことはきたざわ健康まねきの会において参画・協働の姿勢が引き継がれてきたことの表れといえる。課題をまねきの会のメンバーで相談しながら解決することに留意してきたことが、行政主導でない 3 者(区民・事業者・行政)の協働の形に結びついたのではないかと考えている。

事務局：北沢総合支所健康づくり課

[参考文献]

地域づくり型保健活動の考え方と進め方 医学書院 岩永俊博 著

【注】

※1 “きたざわ健康まねきの会”とは平成13年8月に発足した、地域で活動している方々や事業者など様々な分野の幅広い世代の人たちが集まり、行政とともに地域の健康を考える会。

『みんなの健康を招く』ということから、“豪徳寺の招き猫”にちなんで名づけられた。平成18年度に新しいメンバーを加え、後期健康きたざわプランを策定し、現在、推進中。



メンバー構成

《区 民》北沢地域町会連合会、民生児童委員、青少年地区委員、世田谷区高齢者クラブ、身近なまちづくり推進協議会、NPO団体、せたがや健康づくり区民フォーラム委員、PTA代表、在宅栄養士会、子育てサロン、Dancho会、地域自主活動団体《事業者》商店街振興組合、(財)世田谷区保健センター、北沢地域社会福祉協議会、昭和信用金庫、北沢あんしんすこやかセンター

《行政》保育園、小学校、中学校、児童館、北沢公園管理事務所、世田谷保健所、北沢総合支所（地域振興課・街づくり課・生活支援課・保健福祉課・健康づくり課・出張所・まちづくり出張所）

《学識経験者》桜美林大学大学院教授

※2「地域づくり型保健活動」(System Oriented Joyful Operation : SOJO model) とは・・・話し合いの方法に参加的描画法 (Participatory Goal Visualizing Method : PGVM) を用い、地域住民の健康な暮らしを具体的な姿として描き、その目的の実現を統合的に志向し、そのための方法を住民や多分野の人たちで一緒に考え決めていくという話し合いの方法とその経過をたどってできた計画書に基づいて活動をはじめ、途中経過を検討しながら進めていくという活動方法。

※3 目的関連図：誰が何をやる、という具体的な取り組みがあげられている。この目的関連図全体を普及し、それぞれができることを進めていくことで、目標に近づくことを目指す。例を示す。

【子育て世代】
(第1グループの一部)

